

さかづきと市之倉

陶磁器の産地である市之倉では、2 世紀以上にわたって「さかづき」を専門に生産してきた。

さかづきとは、直径 6 センチほどの縁のある小さな茶托型の酒器のことである。陶製の酒器としては最も古いものの一つで、古墳時代（250-552）の土製のさかづきも見つかっている。その後、木や漆を使ったさかづきも登場したが、当館に展示されているような磁器製の酒器は、熱燗が一般的になった 19 世紀初頭になってから普及した。現代では、カジュアルに飲むような酒器ではなくなったが、フォーマルな場面では今も使用されている。

美濃地方では、陶磁器の産地ごとに得意分野があった。市之倉では、良質な粘土の埋蔵量が少なく、商業の中心地から離れた山間部に位置していたため、小型で持ち運びが容易な陶磁器を中心に生産することにした。陶工たちは、酒器や煎茶を飲む際に使用される茶碗を作り始めた。19 世紀末には、日本で作られる酒器の半分以上が市之倉のものになったと言われている。今では大規模な生産は行われていないが、市之倉には 50 ほどの窯が残っており、今でもその多くでさかづきが作られている。